



巻頭言

人間らしさ

(財)日本植物調節剤研究協会 評議員
(財)日本植物調節剤研究協会 近畿中国四国支部長

富久保男

時の経つのは早いもので、本協会支部長をお引き受けしてから三か月が過ぎた。前任者の西尾隆雄先生は本職を10年以上にもわたり切り盛りしてこられた大ベテランである。正直言って、西尾先生以上にこの仕事ができるだろうかと、不安である。

先生以上に仕事ができるだろうかと、言いにくいことをあえて言う理由は、人間本来自分が一番になりたいと思っているようで、本稿の主題の一つでもあるからである。本当のところは、関係者の意をくみ上げて、私なりに精一杯任務を果たそうと、静かな気持ちでいる。そのためには早く仕事の全体像をつかまねばならない。

ところで、私は4年間、岡山県農業試験場長を勤めさせていただいた。その間、昨今の情勢を反映して、15%の人員削減に自ら努力した。試験場始まって以来初めての経験である。試験研究の課題化や成果の評価に注ぐ時間は自ずとそれだけ少なくなった。職員には申し訳なかったと思っている。ただ、職員削減の過程で、現在の農業試験場の役割、役立つ成果等をゆっくりと振り返る事が出来た。15%であるから、各研究室はそのまま残し、成果の活用場面が少ないと思われる業務を削減することにした。

問題はここからである。私は、試験研究に情熱的なベテラン職員のプライドを傷つけることを最も恐れていた。うまく行かなかった時の事を想像すると、自分の苦しさが目に見えるようで、何としても関係職員には納得してもらいたかった。とにかく説明と反論に対する明快な解答が必要であった。案の定、私が歴代の中で一

番悪い場長であるとの批判もあったが、場長の言う事なら皆反対はしないよと、内心落ち着く言葉も頂戴した。しかし、削減の仕方が最良であったかどうかは今も分からない。

この間、多くはないが農業関係に携わる人達との関わりの中で、人間とか人生について考えさせられる事が多々あった。他人の言葉を拝借しながら、私の気持ちの一端を披露して、人間回復の願いとしたい。

まず農業については、農業に対する価値観の溝はなかなか埋まらず、意識改革は難しい。事に当たっては、背伸びして新しいことを考えるのではなく、自分の味を出す事。例えば今過疎地が求めるもの、それは綺麗事ではなく、第一に生活環境の整備だと認識したほうが良い。

次に人間の生き方であるが、地位が上がれば権力者でなくても、頑張りすぎたり、心が歪みやすくなると自覚しなければならない。人間誰もが皆同じ様に生き延びる力を与えられている。それをできるだけ壊さないこと。それには目標を高く持ち、その上で、一言・一行を付け加える事か。この一言にどれだけ重みが出るかは私自身の修練と職員を思う生き方以外に無い。

最後に、ホトトギスの兄弟がいた。兄が病気になったので、弟は山芋を掘って兄に食べさせた。兄は、弟はいつもこんなに美味しいものばかり食べているのかと思い、弟の腹を包丁で割って調べたら、芋の皮や筋ばかりであった。

生きる条件は、制度ではなく品性と徳である。法律にも宗教にも抜け道はある。唯一抜け道が無いのが恥辱心である、との言葉を思い出す。